

令和3年度 第2回 国産材の安定供給体制の構築に向けた 東北地区需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日 時：令和3年10月5日（火）10:00～12:00
- 2 場 所：ウェブ会議（Zoom）
- 3 出席者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配付資料：別紙のとおり
- 5 概 要

（1）冒頭挨拶

○東北地区需給情報連絡協議会 鈴木 会長（ノースジャパン素材流通協同組合 理事長）

昨年来のコロナ禍、今年のウッドショックによる木材需給のアンバランスが非常に大きな問題になっていることから、今回の需給情報連絡協議会が開催されることになった。

なぜ、東北地区で需給協議会を開催するのかといえば、それは全国7地区ごとにそれぞれ需要と供給の関係が微妙に異なり、全国統一という訳にはいかないためである。とりわけ東北は、川上が九州とは違い、ヒノキがほとんどない一方、スギ、カラマツ、アカマツ、広葉樹など山の資源に多様性があり、また国有林の比率が非常に高いという特徴がある。加えて、川中の特徴は、全国の合板工場が集中立地しているという特徴があるほか、川下についても、東北から、製品が全国各地へ流れているということで、地場の需要だけではなく、他所の需要にも貢献しているところが大きなポイントではないかと思う。

現在、ウッドショックの第2波ということで、合板工場における丸太不足という話が聞こえてくるが、こうした東北の特徴を踏まえつつ、情報交換をしていただいた上で、何らかの対策の提言ができればと思っているので、積極的にご発言いただきたく、よろしく願い申し上げます。

（2）議事

○秋田県立大学 木材高度加工研究所 高田 教授（以下、座長）

今回の需給情報連絡協議会において、是非、東北の現状をお話いただき、情報共有して今後への対策の種になるようなことを皆さんと考えていきたい。

それでは議事に入りたい。輸入や国産材の需給状況と、9月10日に開催された中央需給情報連絡協議会の概要、また、この情勢に対応するための令和4年度林野庁予算概算要求等について、林野庁から資料の説明をお願いする。

○林野庁 木材産業課 高木 課長補佐

資料1～5について説明。

○高田 座長

輸入材については、米国の住宅着工はまだ好調であり、木材価格自体は以前の水準近くまで、この数か月間で下がっている。輸入量の増加はまだ厳しく、欧米材も含めて12月ぐらいまでは厳しい状況である。木材の製品加工の状況はフル稼働で生産しているが、問題は原木の不足ということと、製品在庫も少ないという状況ということだと思われる。来年度の予算要求については、ウッドショックの前から大きな問題であったが、サプライチェーンの構築に対する予算措置も考えていただいているとのことであった。

次に、構成員の皆様から、現状、見通し等についてお話をお伺いしたい。まずは、川下の建築事業者の方から、6月の協議会開催時に比べて、どういう状況になっているか、新規受注の状況、木材の調達等、現状と見通しについてお伺いしたい。

○(一社)JBN・全国工務店協会 加藤 理事

6月頃からあまり状況は変わっていない。材料の納期遅れや、値段についても毎月、見積りする度に上昇しているような状況。我々建設業界からすれば、春先から契約している物件に木材価格上昇分を転嫁することは、なかなか難しい。また、横架材については、まだ入りにくい状況であり、そうした中で、住宅そのものをコンパクトな形にして、スパンを狭くするなどの対応を行っている。今の状況を見ると、木材不足、値段の上昇などにかかなり左右されており、工程がなかなか組めないことが一番困っている。

○全建総連 北海道・東北地方協議会 宮城県建設職組合連合会 鎌内 会長

一番の問題は、一度見積りをした価格について、木材価格上昇分をどう転嫁するかということ。せっかく受注しても転嫁できなかった、或いは受注しても転嫁できず利益が出なかったなど、そうした問題が一番多い。木材価格が上昇した影響で、利益幅が少なくなっている。利益幅の減少により、下請業者等への発注価格の低下や、賃金の減少といったような影響も起きている。

今後、また今回のような状況が起きた場合、このような問題を発生させないように、行政、木材関係者と我々を含めた関係者でしっかり方策を決めていってほしいと思う。

○高田 座長

今回とはまた違う理由で、再び供給がタイトになった時に、また同じことが起こるようなことが無いよう、学習してその度に苦勞することのないようにすべきというご提案であった。建築資材の不足感は、まだあるのか。

○(一社)JBN・全国工務店協会 加藤 理事

不足感はある。工程に影響が出ているので不安は拭えない。

○全建総連 北海道・東北地方協議会 宮城県建設職組合連合会 鎌内 会長

不足感はある。不足感の影響で便乗値上げも発生しているのではないかと懸念もある。また、木材以外のいろいろな資材が高騰しており、苦しんでいる。

○高田 座長

木材全般の不足感はあるのだろうが、例えば、米マツが入らないことにより横架材の不足感も大きいのではと思っている。もちろん柱、壁、内装材の不足感はあるのだろうが、部材ごとの違いもあると思っている。続いて、川下に近いプレカットから、話を聞きたい。

○久慈プレカット事業協同組合 日當 専務理事

6月頃の状況から比べると、構造材の手当てについては、危機的な状況を脱しつつあると思っている。ないものを求めても入って来ないので、本来であれば集成材を使うところを無垢材に切替えたりするなど、各現場工夫が行われており、あるものを使えるようにするという工夫が浸透してきたと思っている。ただし、柱など部材によっては、集成材が求められるケースが多く、入手に苦勞している状況が続いている。

また、スギ乾燥材については、価格は全体的に上昇が続いているが、一服感が出てきたように感じる。4月以降、毎月価格が上がってきていたが、ここ来て落ちついてきた雰囲気である。

プレカットの場合、軸組の加工と合わせて、羽柄材、合板の加工等も一体的に行って納品するケースが多くなった。春先は軸組の加工のため、出荷量を制限せざるを得ないところもあったが、最近では合板の入手が難しくなっている。この合板の量によって、受注制限若しくは合板なしでの加工とさせていただいている。

また、羽柄材も一体的に納品するケースも多いので、特に東北では野縁などの下地材について、製材所から購入し、手当てするケースが増えてきているが、時間がかかり間に合わ

いケースも出てきているなど、かなりタイトになってきている。

○(株)山形城南木材市場 安部 代表取締役社長

弊社では、木材市場とプレカットを行っている。相場については、だいぶ落ち着いていると思う。また、在庫がある問屋さんからは、下げの値段を出して来るところもある。入荷量、出荷量に関しては、比較的バランスが採れており、弊社の市場では入荷した分がきれいに売れている。プレカットに関しては、材が入らず、プレカットができないということは全くない。若干納期が掛かるものはあるが、前年並みのペースで進んでおり、10月の加工量は少し多くなると思う。

見通しについては、相場は、中国木材(株)がある程度値上げを打ち出したこともあり、このままの価格帯で年末までは推移するという見通しである。入荷量は、各メーカー、各工場で原木不足になっているので、若干不足気味になると思われるが、納期が遅くなる程度ではないかと思う。出荷量に関しては、横ばいで推移すると思われる。需要に応じた国産材の供給がもう少しできればと考えているが、原木不足は年末まで続くと考えている。

山形県だけの状況と思うが、木材不足はあまり感じられない状態であり、価格は高止まりしているものの、持続可能で採算が採れる適正な価格になってきている。荷主や顧客から話を聞いても、比較的、安心している様子である。今後、長い目で見れば下がっていく見通しもあるが、現時点では需給のバランスは採れているのではないかと思う。

○高田 座長

続いて、川中側から見通しなども含めて状況を伺いたい。

○(株)山大 高橋 管理部長

上期が終了したが、当初は、原木の在庫量を一旦減らす計画を立てていたが、今年は冬になっても在庫は増えないと見込まれることから、引き続き2か月分の在庫量をもって第3四半期は生産していく計画である。生産量については、第1四半期、第2四半期ともに、人材不足がボトルネックになっており、そのような中、前年比110%~120%で生産している。

最近では、柱材がかなり足りないという話は出てきているが、当社の方針は、従来の得意先に最優先で供給し、生産量の半分は自社のプレカット工場、30%はそのプレカットの現場のほうに納めて、残りの20%を外販という対応をしている。

第1四半期では、木材価格の上昇に、追いつけずに苦しかったが、第2四半期からは見積り期限を1か月に区切って、何とか適正な利益が残せる状況になってきた。

第3四半期に関して、非住宅物件の依頼がかなり来ているが、住宅であれば、一般流通材がある程度決まっているため、先行して生産することは可能だが、非住宅の場合、特殊材が増えてくることになる。図面いただいて、木拾いして、最終的に決定してそこからまた時間が掛かって、手配が進まない。長物の5m、6m以上というところで、最終木拾いが終わらない、承認が得られないため、予約はしているが伐倒できておらず、そのような物件が複数動いたときに、果たして、加工して納期に間に合うのか心配なところ。

○(株)ウツィかわい 小野寺 常務取締役 総務企画部長

弊社では、集成材によるスギの柱、カラマツの梁、土台、アカマツの土台を主に生産している。受注に関しては相変わらず堅調である。

弊社の営業担当の感覚とすれば、少なくとも年明け、年度内まではこのペースが落ちずに続くとみており、それに向けて供給を何とか強化したいと思っている。これから冬場を迎えると、弊社の関連の製材工場などでも丸太が凍結して製材の挽き立て量が落ちてくるので、その辺りのラミナの不足をどうやって補っていくかということが一番の課題である。

また、10月~12月の国有林の請負生産から素材生産に戻ってくるまでの間は、スギの原木の不足感が一層強まると思われ、この3か月を今の在庫とこれからの入荷でどう凌いでいくかということも課題である。

○高田 座長

生産自体は、フル稼働プラスアルファぐらいで、生産していると考えて良いか。

○(株)ウツティかわい 小野寺 常務取締役 総務企画部長

生産自体は、フル稼働しているが、5%も増えていない。これを1割、2割増やすというのは難しい。

○ホクヨープライウッド(株) 宮古工場 伊香 資材課長

生産については、ずっとフル生産、フル稼働という状況で対応している。ただし、製品在庫がほとんどなく、顧客に対してすぐに対応できない状況がずっと続いている。また、丸太については、7月頃から入荷が非常に少なく、在庫も減っている状況。皆様のご協力もあり、何とか生産が途切れることはないが、厳しい状況が続いている。

○高田 座長

製材、集成材、合板と、大きなサイズで原木を処理しているところにお話を伺ったが、やはり急な増産はなかなか難しく、原材料の供給についてもすぐに増やしたり、需要にぴたっと合わせた供給を行ったりというのは実際には難しいと思う。先程、川下側からも話もあったが、サプライチェーンをもう一度見直すということについて、川中側から見てどう思うか。今後、こういうところを変える必要があるなど、何かコメントをいただきたい。

○ホクヨープライウッド(株) 宮古工場 伊香 資材課長

製品在庫をある一定量を抱えることができれば良いが、物理的に難しい。製品倉庫を借りてまで積み増しできるかと言えば、そこまでは難しい。

○(株)ウツティかわい 小野寺 常務取締役 総務企画部長

一番ネックなのは人手であり、それを補う形で省力化できる機械を導入することも考えられるが、いくら機械を整備したところで、原木が集まらなければどうしようもないということに行き着いてしまう。素材が安定的に供給できるということになれば、我々も設備投資して、増産に応えることができると思う。原木の供給が一番重要だと思う。

○(株)山大 高橋 管理部長

皆さんと同じであるが、原木、設備、人、販売先、この4つが揃わないとなかなか決定打にはならない。今までの苦い経験からすると、製材の持つ宿命かもしれないが、丸太には芯もあって、当社のキャンター方式だと売れるものと売れないものがやっぱり出てきてしまう。全部の販売先がないといけない。いたずらに売れるもの挽いてしまえば、売れないものが最後に余ってしまうということは過去に経験しており、それを繰り返したくない。繰り返しになるが、原木、設備、人、販売先、これが揃わないと設備投資を決められない。

○新北菱林産(株) 今堀 代表取締役社長

昨年はコロナ禍の中で製紙の需要が落ち込んだことにより、チップ需要も相当落ち込んだが、今年度は、紙の需要はコロナ禍前の水準とまではいかないものの、だいぶ戻ってきた。

チップの需要自体もそれに伴って増えているが、原木の集荷に非常に苦労している状況。特に、広葉樹、針葉樹でいうと広葉樹が深刻な状況である。現在の針葉樹需要の高まりによって、素材生産業者が針葉樹生産に軸足を置いており、広葉樹の原木の入荷状況がかつてないほど悪い。私どもは過去20年間、毎月統計を取っているが、これまで大雪、大雨、台風いろんなことがあった中で、今年8月が最低であった。広葉樹の原木の入荷状況は、かつてないほど非常に深刻な状況と捉えている。私どものチップの納入先である岩手県北上市の製紙工場では広葉樹100%で紙を生産しているが、今後の原木不足によるチップ供給が懸念される。

一方、針葉樹については、伐採量が増えれば、当然低質材の発生量も増えるので、チップ用の原木自体も入荷が増えるだろうと予測をしていたが、低質材は、原木としての輸出がかつてないほど行われており、A材、B材は製材、合板、低質材はバイオと輸出に行っている。我々はあまり高い価格を提示できないので苦労している。

また、広葉樹原木の中から岩手県森連に用材を出しているが、広葉樹の伐採が少なくなればこうした広葉樹の用材の発生量も減ることになる。チップ生産に伴い発生するバーク、ダストも発生量が減少し、これらを利用されている顧客への供給にも影響が出てくることになり、チップ生産のみならず、こうした影響も今後深刻度を増していくことになると思われる。

○日本製紙(株) 石巻工場 西川 事務部長代理兼原材料課長

紙の需要については、昨年はコロナの影響により2割程度需要が減少し、大幅な生産調整をすることになって非常に苦しかったが、今年に入りようやく回復してきた。コロナ禍前の前々年と比べると、白物の紙については、まだ15%ぐらい需要が減少している状況。板紙については、主に秋田で生産しているが、用紙よりは需要の変動は少ないものの、需要は少ないという状況。新聞については、主に岩沼で生産しているが、経済が昨年のようなコロナの影響で悪化すると購読者数が減り、一方で経済が回復しても、購読者数が伸びにくいという苦しい状況である。

今年の前半、岩沼、石巻が地震による影響を受け、世の中の回復から少し遅れてしまった。その地震から立ち直り、4月以降、生産を上げていくというところで、再び緊急事態宣言に入り、思ったような生産ができなかったというのが今年の4月から9月までの流れである。

これから10月、12月については、地震の影響や緊急事態宣言の解除に伴い、しっかり生産を続けていきたい。特に、昨年はチップの消費量減少について、業界にもご苦労をお掛けした。チップは外材、国産材両方使用しているが、可能な限り国産材の利用量のアップダウンを避けるように取り組んでいきたいと思っており、特に10月～12月にかけての供給についてよろしくお願ひしたい。

一般的な話として、ウッドショックでA材、B材不足が騒がれて暴騰するような状況があったが、我々のパルプ、紙の市況においても健全な状態に戻ってほしいと思っている。

○(株)一戸フォレストパワー (株)一戸森林資源 御所野縄文発電所 田口 所長

実際に困っているのはチップを供給する子会社があるが、B材、C材をなかなか集めることができない状況が続いている。それを補填するために、国有林システム販売を活用していたが、それが段々と価格が上昇し、手を出しにくい価格になりつつある。数年前に比べると、2倍、3倍という価格になり、今まではあまり国有林材システム販売は落札できず、地元業者等にご協力をいただいている。A材、B材が良くなると、我々が使うB材、C材が出で来ない。

○高田 座長

これからは、川上側から話を伺いたい。

○青森県森林組合連合会 宮内 事業部長

取り扱い数量は、一昨年の状況と比較すると伸びている。ただし、地域的に国有林の請負作業が盛んであり、森林組合としてはどうしても夏場は保育作業が中心となるので、増加分は微量で大幅な数量の増加にはなっていない。素材生産については、来月頃から本格化するので、例年どおり生産量は増えると思う。

○高田 座長

このような年間を通じた県森連の動きは、青森県だけではなく、東北各県でも共通しているものと思う。

○秋田県素材生産流通協同組合 山田 理事長

秋田県も、青森県森連と同じように、これから冬に向かえば、会員事業者は国有林から民間の手持ちの山に移行していくので、主伐が増えれば、少しでも増産に向かうのではないかと考えている。

また、立木を伐採すると、様々な材が出てくるが、それぞれが平均的に良く売れば、素材生産業者も安心して伐採できる。素材生産業者としては今後の価格の推移等も見つつ、増産の要請に応じていけるようにしていきたい。

○高田 座長

山側にとって、長期協定などで事前に需要量を安定させることは、経営や雇用の面から魅力があることなのか。

○秋田県素材生産流通協同組合 山田 理事長

今から2年程度先まで需要量を見通すことができれば、供給側としても責任を果たしやすくなると思う。

我々素材生産業者は、高性能林業機械を活用することにより、従前よりも遙かに多くの素材を生産することができるようになった。このため、狭い面積の施業地を転々とするよりは、広い面積の施業地の方が効率的に生産できて、安定供給が可能になるので、発注されるロットについても考慮していただくとありがたい。また、繰り返しになるが、山からは決まった品質の材が、一定のボリュームで出てくる保障はないので、素材生産を東北一体で捉え、やりくりすることができれば、安定供給につながると思う。

○高田 座長

マーケットが必要としている量を、クォーターごとの短いスパンではなく中長期的に責任を持って買い取るようなことにしないと、今のお話のような仕組みは構築できないと思う。それぞれの地域ごとに何らかの新しい流通の仕組みが必要になるかと思う。

○物林(株) 国産材事業推進部 盛岡営業室 関口 室長

弊社では、東北の各合板工場や製材工場へ販売させていただいているが、同時に、東京の部署では、製品、集成材等を仕入れて、ビルダーや工務店に販売している。そして、東京の部署では、必要量、時期、今後の見通し等の需給情報をできるだけ共有するとともに、各販売先とも、先々について相談しながら、安定的な販売を心掛けている。

また、弊社には輸入材の直接買い付けを行っている部署があり、ヒアリングをしたところ、まだまだ安心はできないとのことだったので、皆さんが仰っていたように、原料不足の状態は少なくとも春頃までは続くと思う。

素材生産業者からは、東北の中でも場所によっては、今回のウッドショックの影響で立木単価が高くなっており、競争が激しくなっているという話も聞く。

○高田 座長

九州に比べて東北は国有林の割合が大きいので、国有林に対する期待も大きいと思う。国有林の役割を含め最新の状況について、東北森林管理局から話を伺いたい。

○東北森林管理局 間島 森林整備部長

本日は、川中、川下の皆様方がご苦労されている状況をお伺いした。

こうした状況を少しでも解消していくために、国有林の果たすべき役割をしっかりと認識し、これまで原木の生産、供給に取り組んできたところ。生産事業については最盛期を迎えており、7月頃から10万m³水準で続けている。一昨年よりも少し多い状況であり、昨年は6月頃に生産量が急に上昇したような状況となったが、今年の9月末にはそれにもほぼ追いついており、計画どおりの生産状況となっている。特に10月、11月は、しっかりと生産していき、こ

の状況を最後まで維持していきたい。

また、生産された原木は、速やかに販売することになっている。これまでは、土場に長く置きっぱなしになっているというご指摘を受けることもあったが、そのようなことがないように、システム販売については、概算販売方式を大幅に拡大した。毎週、伝票を締めて検査をしている他、担当課長が現場を巡回して、手戻りがないように努めている。例年であれば、今の時期はシステム販売一辺倒になりがちだが、原木の確保に苦勞しておられる方々がたくさんいるので、委託販売での供給も並行して行っている。原木がさらに不足している地域については、例年の約2倍の立木販売を公売に掛けてきた。このように、少しでも、タイトな状況が緩和されるように、取り組んできたところであり、最盛期が続く中で、引き続き、早期の供給に取り組んでまいりたい。現場を動かす中で、ご提案があれば、何なりと言っていたいただければと思う。

また、今の時期は事業体が国有林に入っていて、民有林は対応できないというお話をたくさん伺ったが、局署において、事業体の生産性を上げていくためのプロジェクトチームを立ち上げている。事業体におかれては、国有林の仕事を手際よく終わらせて、民有林に早く移り、さらに利益を上げてもらいたいと思う。

サプライチェーン全体で四半期よりも少し長いスパンの情報を共有することが必要であり、是非、川中、川下の情報を山側にも共有していただきたい。情報を皆で共有することにより、川上も含めて対策を立てていくことが重要だと考えている。

昨年のコロナ禍の影響で、山側の体力と労働力が大幅に奪われており、国有林の入札でも、これまでにない数の不調、不落が生じている。川中、川下でも、労働力の確保には苦勞されていると思うが、再造林まで含めてしっかり対応できるような体制をサプライチェーン全体で考えていかなければならないと感じている。

○高田 座長

最後に、行政側から話を伺いたい。

○岩手県 林業振興課 千葉 技術主幹兼林業・木材担当課長

岩手県では、年度内に川上から川下にわたる情報共有の場を作ることにしており、新たにサプライチェーンを構築できるように支援していければと思っている。併せて、どのようなことが必要かを議論する討論会等を準備していきたいと思っている。

また、県では独自に住宅の補助を設けており、ウッドショックの影響を少し心配していたが、新築118件、リフォーム10件、合計128件の申し込みがあり、9月で予算を使い切った。この事業は、県産材を使うことが補助要件となっており、これまで外材を使っていた工務店が、岩手県の地元の材にシフトした事例もあったので効果を実感している。

○高田 座長

今後のポストウッドショックに向けて、必要な取組や注意点等があれば、ご発言いただきたい。

○全建総連 北海道・東北地方協議会 宮城県建設職組合連合会 鎌内 会長

ほとんどが国産材の供給についての話だったが、今問題になっているのは輸入材。ここに来て急に、輸入材から国産材に切り替えると言っても、後継者の問題など様々なことがあってなかなか難しいということだった。

また、材木業は、我々が若い頃は非常に華々しい業種だったのだが、何故このように、国産材が衰退して、輸入材が盛り上がったのか、その経緯もしっかりと検証した上で、国産材を活かしていく施策を実施し、我々に安定価格で安定供給をしていただきたいと考えている。これは、日本全国の仲間も同じ思いである。

○高田 座長

国産材があるにもかかわらず、輸入材に取って変わられたのには様々な事情がある。簡単に説明すると、拡大造林をした日本のスギが伐期に達していないので、輸入に頼っていたという時代もあった。また、輸入された欧州の材や米国の材は、乾燥がきちんとされたエンジニアリングウッドだったので、建築業界の方々は、構造計算ができる材を使うことが当たり前となる中で、日本のスギは、乾燥が甘かったり、強度の性能が担保されていなかったりして、その状況に上手く対応できなかったことも原因。

ウッドショックだけではなく、サブプライムローンの時もそうだが、日本発の問題ではないことで、日本の市場が混乱するので、今一度、流通や物の作り方についても考えなければならぬと思う。協議会の冒頭にもお話があったように、ウッドショックのような事が、次また起きたらどうするのかというご指摘に対しては、今一度、地域できちんと検討する必要があるのではないかと考える。

○東北地区需給情報連絡協議会 鈴木 会長（ノースジャパン素材流通協同組合 理事長）

国産材の自給率は、製材で50%を超えるまで回復してきてはいるが、梁、桁などの一部の商品は未だに外材に頼っている状況であり、国産材利用が上手く進んでいないというのが事実である。

ウッドショックが、次にまた来た時にどのように対応するかということだが、一定量は国産材で供給するという川中、川上の体制を整える必要があると考えている。製品不足は続いているので、川上側に対し、もう少し供給を増やして欲しいのであれば、その代わりに急に値下げをしたりはしませんよというような単価的な附帯条件を付けて、川上側にメッセージを発信することにより、需給を安定させることが極めて重要だと思う。昨年のコロナ禍の中でも真面目に買ってくれた顧客に対しては、今年のウッドショックの状況下でも、真面目に供給するということが、川上、川中ともに共通しているので、電話1本掛ければ何とかなるという商売から脱却していくことが、大事だと思う。それができれば、恐らく川中、川上の設備投資もかなり進むのではないかと考える。

まだまだ足りないという状況なので、川上側に対してメッセージをきちんと発信することが極めて大事なポイントである。

○高田 座長

急に値下げを求めたりしないという提案に対して、山側の印象を伺いたい。

○秋田県素材生産流通協同組合 山田 理事長

そのようになることを期待したい。事業の見通しと、ある程度の単価の保障があれば、かなり有効だと思う。

○(株)山大 高橋 管理部長

山側から一定の価格で量を供給されるのは、安定生産できるのでありがたいこと。しかし、やはり気になるのは、最後の出口があるかどうかであり、製材工場を平成19年に立ち上げたが、そこが安定しないことが1番のトラウマとなっている。

価格も量も安定的に取引するのは難しいと思うが、そこが担保されないと作り手としては安心できない。

○高田 座長

先程、原木、設備、人、販売先の4つが揃わなければならないというご意見があったが、川中、川上だけの話ではなく、川下側も流通の中で、ある程度噛んでもらうことで安定的な関係が生まれるのではと思う。ただし、大きく見渡して進めていくことになると、プレーヤーが多くなり大変だと思うので、その辺りはやり方だと思う。川上から川中までではなくて、もう少し下側のところまで情報を共有するという体制を整えることが大変重要かと思う。

これからは皆伐が行われることを前提に考えて、川中も一つの業界だけではなく、もしかすると業種の違うところと協定を結んでいくようなことになっていく可能性もある。そのためには、体力のあるリーダーになり得る会社、或いは思いの強い会社が、中心になって進めていく形になるのではと思う。

いずれにしても、これまで想定していなかったコロナショックやウッドショックが起きており、今後もこうしたショックがまた起きるかもしれない、何らかの外圧により、日本の木材の流通や建築の現場が痛手を追うことが当然考えられる。この協議会を通じて、皆様方のご意見をいただいて、ここをスタートとして、是非、それぞれの地域で具体的に進めていってほしい。

(以上)